

サウロは「至るところの会堂で、しばしば彼らを罰してイエスを冒瀆するように強制し、彼らに対して激しく怒り狂い、外国の町にまでも迫害の手を伸ばした」（使徒言行録26:11）。それほどサウロの行動範囲は広いものでした。ラビ・サウロがキリスト教を迫害した理由は何だったのでしょうか。

パウロは「先祖からの伝承を守るのに人一倍熱心で、同胞の間では同じ年頃の多くの者よりもユダヤ教に徹しようとしていた」（ガラテヤ1:14）と言います。ユダヤ教の伝承によれば、メシアは武力を持ってこの世界を統治するために遣わされて来る「ダビデの子」です（旧約外典ソロモンの詩編17など）。さらに「木にかけられたイエス」はメシアのはずがない。なぜなら「木にかけられた死体は、神に呪われたもの」（申命記21:23）だからです。

イエスは永遠のモーセ律法の廃棄を宣言しました。律法には食べてはならない汚れた動物の規定があるのに（レビ記11章）、「すべての食べ物は清められる」（マルコ7:19）と宣言しました。またユダヤ人にとって神聖不可侵のエルサレム神殿については「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる」と冒瀆ととられる言葉を吐きました（ヨハネ2:19）。ペトロたちにも直ちには理解できなかったその真意を理解したのはステファノです。彼は「聖所と律法」の転覆全廃を叫び（使徒7章、要約が6:13, 14）、これが大迫害のきっかけになりました。

「木にかけられたイエス」が律法を廃止するなどということは決してあってはならないことでした。今までユダヤ教の律法と伝承によって支えられていた秩序は、イエス処刑の責任を問うステファノにより終わりの日と新秩序の到来という挑戦を受け、二つの秩序が真正面から対峙し、一方が勝つか他方が勝つかという二者択一が迫られたのです。ついにサウロは旧秩序を守る勢力の突撃隊長となりました。

ダマスコのクリスチャンたちを迫害しようと思はずませていたサウロの行く手を遮ったのは復活のイエスでした。サウロの突然の回心の詳細は使徒言行録の9章に出てきますが、これをパウロ自身が回想する場面は22章と26章にあります。確信犯のサウロを無理やり方向転換させることなど人間業ではできませんから、復活のイエス御自身が圧倒的な力でサウロに襲いかかったのです。将棋がチェスと異なる妙手は、敵の最も強い武将である飛車・角を自分の攻撃力とすることができることです。キリストは敵の最も強い勢力であるサウロをねじ伏せるようにしてご自分の使徒とされました。サウロはこの時の出会いを「主イエスを見た」（一コリ9:1）、主が「現れた」（同15:8）、「御子を私に示（啓示）した」（ガラテヤ1:16）、「イエスに捕らえられた」（コリ1°3:13）と表現しています。（続く）